

## 「見る」お点前、「見せる」お点前

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校2年（神奈川県）

小澤 由莉音

文化祭で見たお点前に惹かれて入部した茶道部。それは、ただお点前を見るだけの日々の始まりだった……。

入部前に、私は高校の文化祭に行った。茶道部は、一般の方向けにお茶会を開催していた。姉が茶道部に入っていることから、茶道に興味を持っていた私は、もちろんお茶会に参加した。そこで見たのは、着物を着て堂々とお点前をする高校生、お菓子を運んで来るときでさえもきれいな所作の高校生だった。お客様のことを考えて振る舞う高校生に、憧れを感じた。

私は、その瞬間に茶道部に入部することを決めたのだった。

そして4月、あの高校生のようにかっこいいお点前ができるという期待を胸に、私は茶道部に入部した。初めての部活では、先輩がお点前を披露してくださった。私も早くお点前をしたい。そう強く思うようになった。

帛紗捌きなどの割稽古が終了し、私は「ついにお点前ができる」と胸が高鳴った。しかし、先生から言われたのは、「1年生は、先輩のお点前を見て覚えなさい」という一言だった。入部すれば、すぐにお点前をさせてもらえると思っていた私は、見るだけでは楽しくない、と感じていた。

そんな私が、「見る」ことの大切さに気付いたのは、初めてお点前をしたときだ。

緊張しながら、お釜の前に座って驚いた。次に何をすればいいのか、身体が、頭が、分かっていたのだ。私は、先輩のお点前を無意識のうちに真似していた。

そして、気付いた。「見る」時間は、ただの退屈な時間ではなく、先輩の技を自分に吸収するための時間なのだ。

そこから私は、お点前を「見る」ことを楽しいと思えるようになった。そして、「見る」ことで茶道についての考えが深まった。

先輩のお点前を見ていると、まるで自分と先輩の呼吸が重なっているように感じることもある。先輩のゆっくりとした動作に、心地良い音に、自然と心が引き込まれていく。

そこで、ふと考えた。先輩は、「見せる」お点前をしているのではないかと。茶道には、お客様に楽しくて美しい時間を提供するという気持ちがある。そう、先輩は、自分たちの練習のためのお点前ではなく、人を楽しませるようなお点前をしていたのだ。先輩のお点前を多く見たからこそ、先輩が何を考えながらお点前をしているのかが分かったのだ。

また、「見る」ことで、お客様の気持ちが分かったのも大切なことだ。お点前を見るときに、何に感動し、何に心惹かれるのか、お客様の立場になってみないと分からない。

つまり、私は「見る」ことで、お点前をする側と見る側の両方の考えを知ることができたのだ。この1年は、私の茶道人生においてなくてはならないものとなった。

そして、後輩ができ、私はお点前を「見せる」側になった。後輩たちは、お点前を見るだけ

で、まだ楽しくないと感じているかもしれない。

そんな後輩たち、いや茶道をしてみたいと思っている人、全員に私は伝えたい。お点前が上達することよりも、その過程を大切にしてほしいと。「見る」ことで、自分の視野が広がっていくと。そうして初めて「見せる」ことができるのだと。

「見る」ことは、退屈かもしれない。それでも焦らず、見てほしい。その道を、一步一步、丁寧に歩いてほしい。きっと、何かを得られるはずだから。